七八歳の美しい令嬢風の娘の油絵の肖像が掛かつてゐる。端手な模様の儀式服は、明かに婚禮のそれである。

室のやゝ下手には、博士が常用の引出し附きの机があり、其脇の小机には、一の怖ろしく大きな二折本（フォリオ）が載せてある。黒い柔革で裝幀して、どつしりとした銀の鈎（クラスプ）が附いてゐる。脊に例の金文字の書名が印してあるでもなく、何の書だか分らない。

室の中央に、やゝ大きな圓形のテーブル。それを圍んで、腕掛け椅子だの、ソファだの、五六人が掛けられるやうな設備が出來てゐり、なほ方形のテーブルが添へてある。

正面の腕掛けに着席してゐるのは、此家の主人公の博士である。齢はもう七十以上らしく、品のよい白頭翁、長い鬚髯も白く美しく立派である。一度も妻を娶らないで、一に學術を友として此年に及んだのである。博士の左右に、だらしなく、不規則に、打寛（うちくつろ）いで、併しいかにも元氣なく、椅子やソファに倚つてゐる來會者は、いづれも博士の何十年來の知人で、おの〳〵六十七八以上七十位ゐらしく、三人は男性、一人は女性である。男性の第一は、名は三田堀浩造といつて、四十歳臺には鐵成金の一人として盛名のあつた男だつたが、株の暴落に次ぐ

或投機事業の失策と或刑事問題の故で、忽然零落し、今では立派な洋服細民の一員である。第二は、非職大佐黒島五郎太といつて、日清戰爭當時には、多少の功勞があつて、勳章にも有りついた人であつたが、其前後に、血氣に任せて甚しい放縱な生活をした報いは覿面で、今は病氣の問屋といふみじめな老人。それに、ある重大事件の嫌疑其他で、社會の信用はとうに地に墮ち盡し、肉體、精神、共に古瘡だらけ。第三は元代議士の糟田杵夫（きねを）で、中年は主として其イヴル・フェームの故にノートリヤスになつてゐた男だつたが、失脚又失脚して、三十年前に政界を退いて以來は、次第に世間から忘れられて、現代人には全くのノーボディーとして取扱はれるやうになつたのが、結句仕合せだといふ敗殘政治家である。三老人とも、今はもう意氣沮喪し盡して、昔のノートライエチーの痕跡もない。

もう一人殘つた女性といふのは、これも七十近い老女で古比野（こびの）の未亡人と呼ばれてゐる。甘やかされて育つたさる高等官の一人娘であつたので、妙齡時代には、才色双絶の何とやらと方々の婦人雜誌で煽て上げられた結果、女優として世に立たうと志し、或富豪連の息子まじりの素人劇團のスターとしてデブューを試みたのがはじまりで、一時は大

評判の天才令嬢、聞つて、もう其頃からいろ〳〵いかゞはしい噂があつて、中途で女優は止めたが、比較的婚期はおくれ、二十五歳の冬に、梅田某といふ豪商の嗣子で大金銀行の理事をしてゐた男に縁附いたが、仔細あつて不縁になり、其後二十九歳の年に、齢の二十五もちがふ古比野子爵に再嫁したが、其際も其以後も、新聞の三面種になつたことが數回あつた。不幸にして其スカンダル最中に、第二の夫の子爵にも死別れて後家となつたが、餘りに悪評が擴がり過ぎたので都にはゐたまらなくなり、もう二十年とのかた、ずつと通して、葉山に退隱生活。葉山には、たつた一ケ所だけ賣り殘じた亡子爵の遺産の別莊があるのである。

序でながら、前記の三男性は、或は時を異にして、或は時を同うして、此未亡人と多少の情的關係があつたと噂されて、其鞘當筋の逸話を屢〻新聞紙に書き立てられたことがあつたと附け加へておく。

幕が開くと、博士は椅子から起ち上つて

博士　信用なさらないのも無理はない。わたし自身も實驗して見たまでは、半信半疑でゐたのです。併しながら、今朝一疋の死にかゝつてゐた蝶に其靈泉を試驗するに及んで――現に其蝶は……

と言ひかけて周圍を見廻したが

つい、今がたまで、そこいらを飛び廻つてゐたのだが――漸くそれを信ずるやうになつたのです。とにかく、實物を御覽に入れることにしよう。暫く待つてゐて下さい。

博士は輕く四人に會釋して、上手の扉を開けて、奥へ入る。

四人はそれを見送つて、互ひに顔を見合せて、變だれといふ思入れ。

先づ糟田が口を開く。比較的此男がまだ元氣がある。けれども、聲は嗄れてゐて、弱々しい。又三人とも耳が遠い思入れ。折々聞き違へをする。

糟田　三田堀さん。君は今の話をどう聞きました？　大將の樣子が少し變ぢやアないかね？　われわれに比べればこそだが、齡には勝てないと見えて、去年の秋以來、めつきり衰が弛んだやうだぜ。

三田堀　さア。戯談ならとにかく。眞面目でいつてゐるのだとすると、どうも正氣の沙汰だとは思はれないねえ。もつとも七十一の今年まで獨身でやり通した變り者で、幾らか不斷から變なこともあるがね。化學作用か何かであればだが――外國で新たに發明された藥液でも

あれば格別だが――それにしても、二十年も三十年も若返ることが出來るなんてことは、どうも事實とは思はれんねえ。お伽話か何かのやうだ。

と力なげに笑ふ。

大佐　さうさ、無論おどけばなしだらう。

未亡人　おどけ話？　お伽ばなしと、おつしやつたのでせう？　お伽ばなしといやア、古い落し話に、さういふやうな泉の話があつたぢやありませんか？　そら、ある處に、ある老人夫婦がゐて、ある時、そのお爺さんのはうが、山奥で、不思議な泉を見附けて、それを飲んで、何十年も若返つて、昔の通りな、水々した、好い男になつて歸つて來ると、お婆アさんが羨しがつて、同じ山へ出掛けて行つて、其泉を飲んだが、あんまり慾張つて飲み過ぎたもんだから、只の赤んぼに還ッちまつて、オギャア〳〵と啼いてたて話が。

大佐　或ひは、化學作用はお手の物だから、けふの會の餘興に、一寸した手品のやうなことをして見せるのかも知れん。ま、見てゐて見るさ。

糟田　とにかくだ、かう五人が一つ處へ一しよに集まつて話をするといふのは珍らしいね。

未亡人　事によると、二十年ぶりかも知れませんね。

三田堀　二人ぐらゐはともかくも、三人と一しよに顔を合せたことは、少くとも大正になつてから

はありませんよ。

此時、博士は、大事さうに、水晶のやうな透明な一種の水をたゝへた、古風な、やゝ大形の、蓋附きのガラスの瓶を兩手に捧げ持つて、十四五歳の少年にシャンペン盃を四箇、盆に載せたのを持たせつゝ上手の扉口より出て來て、中央の圓テーブルの上へ置く。博士は少年に向ひ

博士　よし〳〵。そこへおいて行けばいゝ。用があれば呼ぶから、それまては、だれも爰へ來ないやうに、さういひつけといてくれ。……ドアをよくしめて行け。……

少年は會釋して出て行く。

（四人に瓶を示しつゝ）諸君、これが今お話したファウンテン・オブ・ユース卽ち回春泉と私が譯した靈泉なのだ。かういふ性質の靈泉に關した傳說は世界的で、何處の國にもある。東洋でも隨分古くから言ひ傳へてゐたのであるが、要するに、それは、神話、小說たるに過ぎないとせられてゐた。先刻一寸お話しかけたポンス・デ・レオンといふ西班牙人は、コロンブスとほゞ同時代の冒險旅行家なのだが、其時分特に評判の高かつた此の回春泉卽ち若返りの泉を探るのを第一の目的として、新大陸へ渡つたのでした。其本源地は、フロリダ半島の南部だといふ風に專ら噂されてゐたので、彼れは種々の危險を冒して、約半ヶ年も

半島の南部及び西部を旅してゐたのであつたが、つまり、捜し當て得ないで、旅行中にマラリヤ熱か何かに罹つて、空しく死亡したと言ひ傳へられてゐる。私は、二度目米國へ行つた時――卽ちもう三十年前の事だが――ちやうど三ヶ月間フロリダに滯在しなけりやならん用事が出來たのを幸ひに、例の好事癖から、種々の古記錄を調べて行くと、妙に方角が附きさうになつて來たので、乘り氣になり、同地のドクターで私の親友であつた男と一しよに、此靈泉の探檢をやつて見たのでした。が、折わるく風雨つゞきで、肝腎の場合になつて、目指した深山幽谷への通路が塞がり、如何ともしがたいので、天氣の定まるのを俟つてるうちに、豫定の滯在日限が切れたので、第一旅費が足らなくなり、遺憾ではあつたが、其企てを中止して日本へ歸るとにしたのでした。もうそれから、まる三十年もたつたのですから――それに、其友人のドクターも、其後程なく死んで、彼地との音信が絶えッちまつたから――其事はとうに思ひ出しもしなくなつてゐたところ、最近になつて、思ひがけなく、其友人の息子で、同じ醫師をしてゐる男から、長い手紙をよこした。それによると、彼れは亡父の遺書中の記事にもとづいて、其志を繼いで靈泉の探檢を三ヶ年かゝつて試みた結果、幸運にして遂に其志を遂げたといふ報告なのです。で、同じく遺書の趣旨によつて、亡父が當年の同志者たる貴下に、辛うじて得た此貴重な靈泉の幾分をお贈りするから、試驗の上、科學的說明が附くものなら、それを附けて返辭を送つて貰ひたいといつてよこしたのです。……

此長ゼリフの間、四人は折々顏を見合せて信じかれた思入れをしてゐたが、此時、一二人思はず笑ひ顏になる。

諸君はまだ信用しないで、內々冷笑してをられるやうだが、論より證據だから、先づ一つ試驗して御覽に入れよう。

博士は又起つて、室の一隅から前に特記しておいた黑柔革表紙の恠しげな、大きな二折本を重さうに引抱へて戻つて來て、それをドサリと方形のテーブルの上へおろし、其銀の鈎をはづして卷を開き、一見して中世紀版だと分る眞黑な、太い、不細工な、活字で印刷してあるページを何十枚かはぐると、そこに嶮て挾んであつたらしい乾からびた薔薇の花が出る。莖に葉が二枚ほど附いてゐるが、何もかも全く變色してしまつてゐる。博士は、それを大事さうに、そつと摘んで四人に示しつゝ、靜かに

博士　御覽。これは今から五十五年以前に咲いた花で、此通り萎びッちまつてゐる。（といひつゝ油繪の島田髷の美人像を見やつて）すなはち、あの依田しづ子が私と婚約の成つた其日に贈つてくれ

たのですが、御存じの通りのわけで、其翌日から俄に發病して、わたし自身が診察もし、調劑もして、治療に手を盡したのでしたが、其效もなく、とう〳〵あゝいふことになッちまつたので、それ以來、彼女の記念品だと思つて、かうして保存しておいたのですが、先づこれで試驗して見よう。……諸君は、此五十五年を經過して萎び盡した花を元の通りに色も香も又光澤もある花に復活させることが出來ると思ひますか？　思ひませんか？

四人ともすぐには答へない。やがて未亡人が口を開く。

未亡人　只今もねえ、ちやうどそのお噂をいろ〳〵致してをりましたのですが、これで、わたしなんぞもねえ、若い時分にはねえ、隨分さういふやうなことが世の中に有りさうだし、又あればいゝといふやうな風に思つてゐたこともありましたつけが……

大佐　もうかう老い込んぢまつちやア、世の中に、不思議も、面白いともなくなッちまつてなア。

三田堀　全く。（と相槌を打つ）。

糟田　ぢや、君がたは信じないのですね。よろしい。ま、ともかくも試驗して見ませう。

博士　博士は密封してある瓶の蓋を取り除けて、萎びた花を所謂靈泉の中へ投げ込み、それを四人の目の前へ進めた。四人は一齊に首をさしのべて、瓶を覗く。暫くすると

博士　そら〳〵。そら、御覽。花瓣がいごき出したらう？

未亡人　（驚いて）ほんにねえ、いごいてますやうですよ。（と懷中から眼鏡を取出して、掛けて見て）あら、ほんとにいごいてますよ。あゝあゝ、だん〳〵延びますよ。まるで酒中花のやうに。

三田堀　（これも眼鏡を掛けて）あゝ成る程！　色が變つて來た。

大佐　葉が青くなつて來た。こりやア奇だ。

糟田　（つく〴〵見てゐたが、微かに冷笑して）や、、どうもお手際です。鮮か〳〵！……花瓣に仕掛がありんですな。

未亡人　ぢや、手品でござんすかい？

三田堀　化學作用でげせう。

博士　馬鹿なことをいつちやいけない。仕掛けも何もあるもんか？……

といふ途端に、博士の頭の邊を一匹の蝶が飛び廻り、やがて未亡人の頬を掠めて、梁の方へ飛んで行く。博士はそれに目を着けて

あ、あの蝶を御覽。傳說の決して僞りでなかつたことは、あの蝶の復活によつても證據立てられる。あの蝶は、つい今朝がたまでは死にかゝつてゐたのだ、それを暫く此水に浸しておいたら、あんなに元氣になつた。……たしかに同じ奴だ。

糟田　（首を振って）だが、それほど效能があるなら、君自身が先づ試みたらよからうぢやないか？

はゝはゝはゝ！　（と力なげに冷笑して）僕らは財産はなし、信用はなし、おまけに此みじめな健康狀態だ。今更若返つたからつて、どうもかうもしやうがなさゝうだ。

未亡人　さうですよねえ、全く。……あんたこそ三十も若返つて、第二のしづ子さんを選擇なすつたらようございませうにね。（と力ない聲で）はゝはゝはゝ！

大佐も三田堀も同じく力ない聲で一しよに笑ふ。

博士　君たちはわたしを嘲弄してゐる積りだらうが、わたし自身が試みないのに、何の不思議もない。わたしは、專心一意、只學術其物に沒頭して、妻をも迎へず、名をも、富をも求めず、七十年の年功を積むまでには、隨分いろ〳〵な艱難をも辛苦をも經驗して來たんだから、今更むざ〳〵と若い時代へ逆戻りしようなんぞとは思はない。わたしはすべきだけの事を順當になしつゝ此年になつた積りだから、決して年を取つたのを後悔しない。わたしに取つては、若い時代は未熟を意味し、無知不學を意味し、輕卒淺薄を意味し、すべての點に於て、今よりも劣つてゐることを意味する。思ひ出すと恥かしい事ばかり多い。わたしは若い時に還りたいとは決して思はん。けれども君達は、いつも、寄ると觸ると、若かつた昔を懷かしがつて、年を取つてしまつたのを情けながつてゐるぢやないか？　だから、

先刻も一寸いつた通り、わざ〳〵お招きしたのだ。假にも若返りたいといふ氣があるなら、嘘と思ふなり、無駄と思ふなり、手品と思ふなり、勝手なことを思つて、ま、ともかくも、めい〳〵一盃づゝ飲んで御覽。どんな結果が起るか？

（と博士は瓶の水を四つのシャンペン盃へなみ〳〵と湛へる。）

大佐　ほう！　中々いゝ匂ひがするねえ。

未亡人　（又眼鏡を掛けて見て）あ、沸騰しますよ、まるでビールか炭酸水のやうですね。

糟田　いよ〳〵只の水ぢやアないねえ。

三田堀　どうやら味もよさゝうてげすねえ。

未亡人　透き徹つて、水晶のやうね。とにかくいたゞいて見ませう。

四人一度に盃に手を掛ける。博士はそれを一寸止めて

博士　ちよいと。それを飲みなさる前に——言ひかへれば、もう一度若返つて新たに一生を送りなさる前にです——とにかく、七十年近くの經驗を重ねて來た諸君である以上、更に新たに生活を始めるといふには、多少の準備なり、覺悟なりがなくッちやなるまい。又ぞろ前生活と大同小異の罪惡や恥辱をうか〳〵繰返すべきでもあるまいから、念のために、「おれは前生活では、しか〳〵かやう〳〵のふしだらをしたけれども、今度はもう誓つてあゝ

いふ不都合はしない」といふ風に、せめて三四ヶ條だけなりとも、主要な事を一つ書き式にするか、或ひは頭の中でじつと考へ定めるかして、それからそれをお飲みなさるがいゝだらう。今度は心ず理想的な生活をしようといふ覺悟がなくては、若返つたからつて、恥の上塗りに過ぎないことになるかも知れないから。

三田堀　御敎訓恐れ入つた。しかし若返ることは扨おき、萬一此持病だけでも薄らぐやうだと、わたしなんかは、無論、全く生れ變つたやうな氣になつて、悉く改心して、もう一しきり働いて見たいものだといふ野心も希望もあるんだけれどもねえ、もうかうなつちやア駄目だ！

大佐　全く！

未亡人　が、萬一に若返ることが出來りやアね、君。

大佐　と糟田を見返る。

糟田　さうさ、だれだつて、同じやうな失策を重ねる筈はないよ。そりゃいふまでもないことだ。

博士　ぢや、おあがりなさい。

四人は痺痺れて顫へる手で盃を擧げて、飲み干す。

未亡人　ま、おいしいわね！

大佐　すつかり酒の味だ。

糟田　淡泊ではあるが、こりゃいよ〳〵、只の水ではないことは明かだ。……（獨語的に）怪しい怪しい！

博士　何の怪しいことがあるものか？　天然の泉に酒の味のあるのは東西共に古くから言ひ傳へてゐる。『禮記』に「天は甘露を降し、地は醴泉を出だす」といつたり、「醴泉は美泉の精なり、政（まつりごと）太平なれば則ち醴泉出でゝ湧く」と何とかいふ書（しよ）に書いてあるのは、皆味の甘酒に似てるのをいつたのだ。

三田堀（元氣づいて）して見ると、昔の養老の瀧の水なんかは是れと同性質のものだつたかも知れませんね。はゝはゝはゝ！　とにかく、もう一盃いただかうか？

未亡人　とにかくおいしいから、いたゞきませう。

四人　はゝはゝはゝ！

博士はじつと四人の樣子を見てゐたが、やがて嚴肅な口吻で

博士　諸君はまだわたしのいふことを信じないでをられるやうだが、此靈泉の效果は全く神の如くであるから、諸君は二盃目を飲むや否やずつと若返ることは疑ひを要じない。だから、失敬だが、第二の造化翁たる働きをする特權上、無遠慮に諸君に忠告しておきたいことが

ある。三十餘年來の友人たる本分の上からも、これだけの苦言は呈しておかなければならないのだから。……（と開き直つて）大佐、あなたは其壯年時代をどういふ風にお過しであつたかをば、よもや、御記憶でせう。……三田堀君も、糟田君も、よもや過去の三十餘年をお忘れになつたわけぢやアあるまい。殊に、三田堀君の如きは、鐵成金として、一時は飛ぶ鳥を落す勢ひがあつたのだが、……

糟田　（今の一杯で大きに元氣づいて）さう〳〵、あの頃の三田堀の御前の威勢と來たらすさまじいものだつた。何にしろ、別莊ばかしでも七箇所、御寵愛の副夫人格なのが七人、新陳代謝格なのが……

未亡人　まだしもそれだけなら罪が輕いんですけれど……

三田堀　あ、これ〳〵。今更三十餘年前の舊罪の告發でもあるまい。こりゃどうも、學者の主人公にも似合はない、とんだ音頭取をしたものだ。

博士　いや、あばき立てをするんぢやアない。これから第二次の生活に入らうとなさるんだから、同じ過ちを反覆するやうなことをなさるなと、一應警戒をお加へするに過ぎんのです。……糟田君とてもあの第一次平民内閣當時の行動は何といふことでした？　あの時分には、どの政黨にも……

糟田　おッと〳〵、まゝ。……これゃ恐れ入つた。三十年前の代議士時代の棚卸しを此際改めてするにも及ばんぢやアないか？　一切萬端、心得てゐますよ。もう二度とあゝいふことをする筈はない。後悔先きに立たずだ。もう全く懲り〳〵だ。

博士　ぢや、何もいひますまい。大佐や古比野さんにも、特に忠告しときたいことがあつたんだが、諸君に既にさういふ自覺がある以上、恐らく言ふ必要もありますまい。ぢや、お飲みなさい。

と二盃目を注ぐ。皆々次第に元氣づいて來て、飲む。

未亡人　實際お酒の味ね。

大佐　たしかに旨い。

三田堀　どうも不思議ですねえ。妙に元氣づいて來ますよ。

糟田　さやう。何となく愉快になつて來たね。

大佐　お！　古比野さんの色つやが怖ろしくよくなつて、何だか皺が少なくなつたやうだ。

三田堀　成る程。顏の色つやばかりぢやありませんぜ。髮の色が、何だか大分黑くなつたやうだ。ちよいと。明るいはうへ向いて御覽なさい。

未亡人　さういへば、あなたの顏附もね。

糟田　なるほど。大佐の顔の色も……三田堀君の顔附も。

大佐　こりや妙だ。心持がずつと變つたばかりでなく、手も足も達者になつて來たやうだ。（と手足を頻りに動かす）ドクター、もう一盃くれたまへ。もう一盃。

此間博士は四人の行動に注意してゐたが

博士　どうです？　わたしの言つた通りでせう？　あがるなら、たかゞ、もう一盃が程度でせう。靈泉とても、餘り度を過すと、どういふ有害な結果を醸すまいものでもないから、御注意なさい。わたしは、外に少々用事があるから、暫時の間失敬するが、どうか、只今いつたことをお忘れなさらないやうに。（といひ了つて、三盃目を注ぎて、瓶の中に浸したまゝになつてゐた薔薇の花を取り上げて大事さうに盆に載せ、瓶には蓋をして）では、御免なさい。

と博士は上手の扉をあけて入る。四人はすぐ盃を擧げて、今度はチビリチビリ味ひつゝ飲みはじめる。之より先き、四人ともおひ〳〵に元氣づき、顏色も、姿勢も、髮の毛も、見る〳〵變つて來て、二三十歳も若やぐ。

大佐　や！　どうも不思議、不思議！　諸君、どうだ？　古比野さんが、たしかに二三十年も若返つたよ。

三田堀　なるほど！　こりやどうも！　まるで、それ、例の二十五ちがひの古比野老子爵に再婚なすつてさ、それ、新婚旅行に出かけて、そらあの、國府津のステーションかどつかで、そゝかしやの友村に、「今年はお父さまと御一しよでいらしやいますか？」といはれなつた、あの時分そつくりとも見えまさ。

糟田　或ひは大金銀行理事夫人時代といつてもいゝくらゐだ。

未亡人（尙ほ飲みながら）ようございますよ。たんと棚卸しをなさい。

大佐　棚卸しぢやアない。全くだ。此樣子ぢや、もう一盃飲めば、更にお互ひに、もう十年も若返るかも知れない。はゝはゝはゝは！

三田堀　さやう〳〵。たしかにみんなが三十位ゐ若返へつたやうだ。はゝはゝはゝは！

未亡人はたまりかねて、姿見のほうへ駈けて行く。其足取からが、もう決して老人でない。

糟田　第一、味が全くの酒なのが不思議だ。

大佐　もう一盃やらうよ。

三田堀　やりませう〳〵。……おい〳〵、古比野さん、あんたなんか、もう一盃もやらうものなら、きツとねえ、そら、あの、綺羅星劇團のスター時代ほどに若返りますぜ。

糟田　はゝはゝはゝ！　後家さん、もう、から夢中だ。見たまへ。蠅取蜘蛛のやうに姿見へ密附いてしまつて、科をするわ、振をするわ。まるで女優時代に戻つた氣だ。はゝはゝはゝ！

大佐　無理もないよ。こちとらも、たしかに二三十年若返つたやうだ。

糟田　とにかくだ。かうして、三人がだ、シャンペンの盃を手に持つて、かう向ひあつて話をするといふとだ、例の三十年前の初期の平民内閣の時分の事を思ひ出すねえ、痛快だつたねえ、あの時分は。野黨めが何といはうとだ、へん、我黨は絶對多數を制してゐたんだからねえ、てんで齒が立ちやアしないよ。變政會の〆太喋郎なんて老朽が、見事、取ッちめた積りか何かで、餘計なお節介の彈劾三昧をやりかけたんだが、何になるものか？　大臣の投機商賣がどうだといふんだ？　え、變政會の頭株にだつてだ、其臭みのない奴が何人ある？　投機問題は扨おき、今の世にだ、多少不淨財のお庇を蒙らない政治家や實業家があらう筈はない。だからだ、つまるところ、から騷きで千秋樂さ。ヘッ！　あれでだ、あの内閣がだ、もう三年と壽命があらうもんなら、例の一件は、無論（と三田堀に）君に約束した通りになつたんだがねえ。遺憾だつたよ。をしいことをしたよ。君の沒落は運命でしかたがなかつたとはいへ、あのはうが旨くいつてりやア、まさかあゝ瓦落崩れにゃならなかつたんだよ。

三田堀　全く。しかしです、死んだ子の年を今更算へたつて無駄なこッてす。人間は七轉び八起きさ。なアに、憚りながら、三田堀浩造です、新規蒔直しをやりますよ。さうして二度とはあんなヘマはやりませんや。あの頃は何てつてもまだ青かつたんですよ。まだ〳〵正直に地道ばかり歩いてゐたんで、あゝいふドヂを踏んだんで。

糟田　はゝはゝはゝ！　大きにさうかも知れんね。そこに至ると、大佐は、こんなむつッとした顔をしてゐながらだ、仕事は一段黑ッぽいといはうか、ずるいといはうか、旨いもんだつたねえ。全くの空手で以てだ、十五萬圓をチョンの間は凄かつたよ。

三田堀　而もそれがですよ、ばれかけてばれず、大詰まで鼠色程度でチョン〳〵〳〵なんざ幸運な人でさ。機密地圖のブローカアとは全くいゝ思ひ附でしたよ。

大佐　はゝはゝはゝ！　だが、かうなッちまつちやア、あんまり幸運でもないよ、君。

（といひながら椅子を棄てゝ歩き出す。）

糟田　なんの、これからだらうぢやないか？　お互ひに弔ひ合戰をしようぢやないか？

三田堀　勿論。けれどもねえ、迚もゝう二度とあゝいふ世界的機運は近々に來さうもないから、わたしはねえ、今度は、ずつと方針を變へる積りだ。

糟田　何をやるね君は？

三田堀　實はねえ、あの際にねえ、君にもまだ、實はあれだけは言はなかつたがねえ、實は、あの際、盃買（ボンバイ）の或關係者と、そつと一件を輸入しようといふ計畫を殆ど九分九厘運びかけたんだよ。ところがあゝいふわけだらう？　つい、それなりけりになッちまつたがね、今度は、——何をしようにも、此すッてんてんぢやアしやうがないから——さしづめ、あのはうを專門的にやつて見ようかと思つてゐるんだ。が、それにしても……

此以前大佐は古比野未亡人の傍へ行き、二人で鏡の前で何かいちやついてゐる。糟田は三田堀の話を遮つて

糟田　おい、ちよいと。……見たまへ、大將相變らず行動が機敏だ。もう古比野と何か舊盟を訂しはじめてゐるよ。おや〳〵！　御苦勞さまに、靈泉のお代りまで、わざ〳〵持つてつて飲ましてゐるよ。

此うち古比野未亡人は大佐から受取つた靈泉の盃を手に捧げてそれを飲みながら、尙ほ姿見の前に立つたまゝで、なまめかしい科（しな）をしながら振返つて、若々しい聲で

未亡人　ちよいと〳〵、皆さん。どなたもこゝへいらつしやいね。さうして御自身でよッくお顏を御覽遊ばせよ。ほんとに不思議よ。ほらね、大佐さんが二十七八におなんなすつてよ。ほら？　わたし、どう？　十七八に見えて？　ほゝほゝほゝ！

これにて糟田も三田堀も急いで姿見の前に行く。四人とも見物へは後ろ姿になる。此時どこからともなく陽氣な西洋音樂が聞えて來る。四人は何か類りに笑ひ戯れつゝ鏡を見てゐるうちに、此音樂にさそはれて、いよ〳〵浮かれ出し、まるで酒に醉つた人の如くに、先づ大佐が道化た唄を歌ひはじめる。糟田がそれに和する。やがて未亡人も聲を合せた。そのうちに音樂が舞踏の曲節に變る。と三人は未亡人によれつもつれつして、競爭的に、かはる〴〵ダンスをはじめる。次第に競爭が喧嘩調子になる。

大佐　何するかね君？　先約だよ我輩は！

糟田　何？　先約？　約の先後（せんこう）なんかを問題にするかい君は？　ぢやア僕こそ先約だ。僕とえん子さんとの訂盟は、其根本因をいふとだ、綺羅星劇團創立の際に始まつてるんだ。えん子さんに女優志望の念を起させたもだ、白鳩嬢としてのデブーを冒險させたもだ、其實、主としてえん子さんのお父（とう）さんに於ける僕の信用と勢力とに原因してるんだ。

大佐　馬鹿いへ！　馬鹿いへ！

糟田　のみならずだ。……ねえ、えん子さん、あんたは美人薄命の諺に漏れないで、女學校の秀

才時代から新劇團の天才令孃、梅田理事令夫人、古比野老子爵の奥方と名も實も結構づくめであつたやうであつて、其實は波瀾狂瀾、榮辱禍福の、ねえ、隨分いろんな道具變りがあつたものだ。ねえ、其の間にだ、とかく舊交を溫めることを忘れなかつたのは僕だらう？　ねえ、さういふ關係上、苟も優越權とか先約とかいふことになりやア……

三田堀　おい！　さう慢勝（まんがち）はさせないよ。若しさういふ舊い關係が此際クレームになるもんなら、わたしにこそ先取權が存してゐるといつていゝ。今だから自白するが、例のAY新聞が頻りに訐き立てたあの一件は必ずしも事實でなかつたわけぢやアないんだ。すなはち僕とえん子さんは、事實、をさな馴染なんだ。そのをさな馴染も尋常一樣ぢやないんだ。ねえ、えん子さん、ありや幾つの時だつけねえ、あなたとわたしが……

未亡人　あれさ、そんなことどうでもいゝぢやないの？　生活が新たになつた以上、さういふ關係も悉く改造される物と思はなけりや嘘だわ。前生活時代の權利なんかは無效よ。要するに、選擇權は專らわたしにあるんぢやなくつて？

大佐　さうだ〳〵。それが一等ロヂカルだ。……さういはれて見ると、君たちは一言もなからう。はッはッは！

未亡人　どなたも御異議はない？

三田堀　ありません。

糟田　ぢや、待つてらつしやい。わたしが鬮をこさへるから。……かうつと。平凡なのぢやアつまらないから……ねえ、かうしませう、……あなたがたの御めい〳〵の肉體の一部分として、必然的に附帶してゐるもので以て、こさへますよ。ようございますか？　御めい〳〵の肌から、目をねぶつてゝ毛を一筋づゝいたゞきますよ。一等長いのをわたしが引き當てた方を第一等として、其の次ぎに長いのを第二等、一等短いのをビリ。……ようございますか？　ぢや、あなたからいたゞいてよ。

と目をねぶり、だしぬけに大佐の鼻毛を拔く。

大佐　あいた〳〵！

未亡人　ほゝほゝほゝ……隨分長いわ。……さ、みんなでよく見ておいて頂戴。かうして此の紙に包んでおいてよ。これが黑島さんのですよ。鉛筆で、上へ「黑」と書いときますよ。……さ、こんどはあなた。

と同じく目をつぶつて三田堀の鼻毛を拔く。

三田堀　あいた！……あゝ痛かつた。

未亡人　弱蟲ねえ、あなたは、承知してゐながら。……かうして包みましたよ。「三」と書いとき

ますよ。……さ、糟田さん。

と糟田のを抜く。

糟田　おー

未亡人　さ、これで三本とも揃ひました。此テーブルの上へ順に並べてよ。めい〳〵で端のところをおさへて〻頂戴。さ、その包みのないのが糟田さん、あなたのよ。これが黒田さん。これが三田堀さん。……ま、どれも隨分長いのねえ。殆ど同じやうね……引ッ張つて、先きをよく揃へて頂戴。……引張りますよ。そうら。どれが一等長いでせう？……あ、やッぱり、黒田さんのが一等長いわ。ほ〻ほ〻ほ〻！

大佐　さ、先取權だ！

と此途端に又も陽氣な西班牙踊だか何だかの舞踊曲が起る。大佐は大浮かれて、矢庭に、笑ひ騷ぐ未亡人を引抱へて、やたらに踊りはじめる。殘る二人は暫くは羨ましさうに眺めてゐたが、糟田はこらへかねたらしく、つか〳〵と進んで、だしぬけに未亡人の腰へ搦みついて一しょに踊る。と三田堀も飛び出して來て、未亡人のかた〳〵の腕を取る。

未亡人　あら、そんな無理なことを！　それぢや踊れやしなくつてよ！

Blushing, laughing, pushing, dancing, struggling and chiding. と〻三人の男は競爭に逆上して、憤激し、掴み合ふ。未亡人はあちらへ引張られ、こちらへ引張られ、と〻傍杖を喰つて、泣くやら、わめくやら。此亂竹騷ぎのはずみてテーブルが引繰り返り、靈泉の瓶は床上に轉げ落ちて微塵となり靈泉はこぼれてしまふ。

此騷ぎの間、例の蝶が又どこからか飛んで來て、爭ふ四人の頭上をひら〳〵ひら〳〵と飛廻つてゐる。

瓶のこはれる響きに、さすがの四人もハッと心附いて、一寸騷ぎを止める。途端に上手の扉(ドア)をあけて、主人公の博士が出る。博士は苦々しげに四人を見て

博士　どうしたといふのです？　亂暴をなさるにも程のあつたものだ。そこを御覽なさい。君達は馬鹿騷ぎをして瓶を微塵にして、靈泉をみんなこぼしッちまつたぢやないか？　それが、前生活の恥や罪惡を記憶してる人達の行爲ですか？　同じ過ちを繰返すやうな愚は決してしない、六十年の苦い經驗を無にはしないと誓つた人達の行爲ですか？……おたしなみなさい。恥をお知りなさい。

これにて四人は夢の俄に醒めたやうな顔付。四方に分れて、惘然として、只せい〳〵と喘いでゐる。此間に博士は床に落ちて萎びてゐる例の薔薇の花を見附ける。

もう少しは自覺する所があられるかと思つたに、實に案外な、呆れ果てた人達だ。（皆々しよげる。）併し、靈泉のお庇で、わたしはいゝ學問をしました。書籍や推理から得たのとは違つた權威のある新知識を得た。今日實驗した所によると、人間その者の本來性が改造せられない以上、どんな回春又は回生の不思議な泉液があらうとも、それは全くの無用の長物らしい。隨つて、わたしは折角萬里の向う海岸から贈つてくれた、おそらく二度とは手に入るまいと思ふ此靈液が、君たちの亂暴で、種なしになつたけれども、敢てそれを惜しいとも思はない。……（と萎びてゐる花を拾ひ上げて）これを御覽なさい。（と四人に示しながら）靈泉の效果が足らなかつたせいか、しづ子の此記念は、また元の、五十五年の昔へ還つてしまつた。

と此途端、四人は一齊にぞつとしたといふ思入。ぶる〳〵と惡感を覺えたらしくふるへはじめる。

未亡人　おや？　どうしたんでせう？

大佐　俄に寒氣がして來た。

糟田　からだぢうがぞく〳〵する。まるで冷藏庫へでも入れられたやうだ。

三田堀　瘧にでも罹つたんぢやないかしらん。

大佐　おゝ手も足も俄にしびれて來た！

糟田　や、古比野さんの顔が！

未亡人　さういふあなたの顔も！

大佐　（三田堀に）君の顔も！

三田堀　ぢや、また年を取るのか？

未亡人　あ、どうしよう！　手足が突張つて來た。

糟田　あいた〳〵。あ、腰が痛い！　腰が！

大佐　あゝ手足がひッつる〳〵！

未亡人　あゝあ！　情けない。どうしませう？　又逆戻りになるんですかえ。

此時暫く影を見せなかつた例の蝶がどこからともなく又飛んで來たが、忽ち博士の前まで來て、パタリと床の上へ落ちる。

博士　（見て）ほゝう蝶も死んだ。……して見ると、靈泉の效用も、詰り一時的のものであるらし

い。アルコールやハシ、やオピヤムなぞと同じに。……併しながら、君たちの今の頼もしくない行動から歸納して、わたしは、たとひ此靈泉の效果が一年乃至五年、十年と持續し得るものとしても、廣く之を人間に施し行はうとは思はないね。徒らに過ちと恥とを反覆させ增長させる幇けとなるに過ぎないと思はれるから。……あゝ、見てゐる間に、君たちは元の姿に戻ッちまつた。君たちのお庇で、一の貴い新知識を得た以上、君たちの甚しい無作法は咎めないことにする。……さやうなら。

博士は上手へ入る。

四人は此間いろ〳〵に跪いたり、苦んだり、しょげたり、悲んだりすることある。其うちに、全く元の通りの老朽姿になる。

糟田　あゝ幻滅々々！

未亡人　ほんとに情けないッたらないわねえ。ぢや、たつた十分か十五分の糠喜びだつたのかねえ！

三田堀　あゝ手や足が前よりも尙ほさかなくなつたやうだ。あゝ痛い！　あゝ痛い！

糟田　あゝ情けない！

未亡人　いや〳〵、さう一概に落膽するにも及ぶまい。（喘ぎながら）現にかういふ靈泉が存在してゐると分つた以上、博士のとこへ來たフロリダのドクターの手紙といふのを盜み出し、泉源地をたしかめた上で、先づ一番に老いてます〳〵壯んな向島の男爵へ此機密を報告し、それを功に相當の資金を出して貰ひ、さうして靈泉をふんだんに輸入する道を開いて、大儲けをすると同時に、日に三回ぐらゐづゝも飲んだなら、或ひは永久に若返へられるかも知れん。一概に落膽するにも及ばん。

糟田　だつて、どうしてあの男爵がわれ〳〵なんかに只の十圓だつて出してくれるもんか？　あ、せめて此の瓶のが殘つて居りやア……

と床へ思入。

未亡人　ほんとに物體ないことをしてしまつたわねえ。

大佐　あゝ、節々が痛い〳〵！

未亡人　まだ少しはこぼれてゐるやうです。

三人　え？

と俯伏して嘗めようとする。

と他の三人も之に倣ひ、犬這ひになつて、爭つて我れ先にと床の水を嘗める。

皆々　ペッ〳〵〳〵！
未亡人　おゝ臭い！
糟田　おゝ臭い！
三田堀　こりゃまるで腐れ水だ！
皆々　ペッ〳〵〳〵！

幕

骨董熱

（舞踊「歌麿と北齋」の開場喜劇（イントロダクション）として作りたるもの）。

時代　現今、四月の末。

場所　東京、どこだか分らぬ公園。

人物

美術品卽賣會幹事（六十七八）。
某流行會顧問（七十以上）。
茶店の女（十六七）。
叔父の紳士（五十五六）。
甥の青年（二十三四）。
文學書生A（十八九）。

若い文學者B（二十五六）。
同　C（二十三四）。
盛裝した夢二式のハイカラ娘W（二十以上）。
其友達の娘X（二十以上）。
ハイカラ娘の母、山出しの老婆（五十六七）。
脊の高い外國人（五十以上）。
其妻の肥つた婦人（四十以上）。
人力車夫。
洋服被た男二人。
中學校の學者（四十年輩）。
何宗大學の教師らしい僧（四十年輩）。
大學教授の博士（六十以上）。
支那人（四十以上）。
學者らしき、教諭らしき、校長らしき紳士大勢。
男女の彌次馬大勢。

青葉になつた櫻の立木が見えるばかりで、廣々としてゐる。何でも此近邊に新古美術品即賣會といふ展覽會がある。下手に公園附の茶屋が、ほんの軒先だけ見えて居てずつと往來へ突出して床几が二三脚、式の如く赤ゲットが掛けてある。座蒲團、煙草盆等。

一番端の床几に一人の老人、六十七八でもあらう、頭髮は眞白だが、餘り禿げもせず、若々としてゐる。服裝は前世紀も餘程遠いはう、端手な、赤い絲のまじつた棒縞の道行振に獵虎の帽子、古風な大形の腰下げ煙草入、目立つて大きい珊瑚珠の緒締。今ちやうど古い軸物を卷いて箱に入れ、風呂敷に包んでゐるところ。美術品即賣會の主席幹事である。

此幹事の老人が風呂敷を抱へて、茶店へ何か棄ぜりふを殘して起ちかける途端に、店の奥から唐突に又一人の老人が出る。

これも矍鑠してゐるが、七十以上らしく、脊高く、色白く、頭の前は坊さんのやうに綺麗に禿げてゐる、鬢と髭と頸元とに雪のやうな毛、白茶がゝつた無地の袴に焦茶色の羽織、若い者のやうな歩き振。これも美術品即賣會に何か緣故あるらしく、見るから何とか流行會顧問といふ風采、年は取つても時勢には後れんぞといふ自信が鼻の先にぶら

さがつてゐる。尊大な口吻、聲は神經的である。時々鼻の先で乾いた聲で笑ふが、目では決して笑はない。笑つた後は殊に佛頂面をする。大抵肩を怒らし、懷手をしたまゝでゐる。假に顧問老人と名を附けておく。顧問老人だしぬけに出て來て

顧問　どうだね今日の景氣は？

幹事　や！（と言ふや否や驚きの表情を忽ち笑ひ顏に作り直してペコリとお辭儀をして）すてきです。ちよつと一昨日の三倍でげす。人間が氣短かになつたんですから、何でも速いのが受けるんでげす。アハヽヽヽ。

幹事老人は根ッからなかしくないのに、鼻の上に皺を寄せて、時々如何にも愉快さうに笑ふ。一體腰の低い男である。笑ふ時は愛嬌のある無邪氣らしい表情をするが、忽ち生眞面目な、時には怖しく心配さうな顏をして見せる。表情の變化が老練な俳優のやうである。

顧問老人はニコリともしないで

顧問　ともかくも同じ場所に新古の美術品を陳列して、實價卽賣仕り候ふといふのは思ひ附きだつたよ、禿頭も灰殼も一緡だからねえ。ねえ君、（敵手の顏を覗くやうにして、ずつと聲を低くし）よしんば贋物にもしろさ、千年以前の美術品もあれば、つい此間バリスで產聲を揚げたばかりの何とか式といふ奴までであるなんざァ二十世紀式だからねえ。だが、とても景氣程にや賣れないだらう。

幹事　（眞面目な表情をして）どうして面白いやうにはけますよ。（呆れた表情で）まるで翼が生えて飛ぶやうでげす。（そろ〳〵笑ひ顏になりかけて）米の値にやお關係なしですから妙なもんでげすよ。アハヽヽヽ。

顧問　（ニヤリともしないで）明治の若造どもまでが、やつと借家離れをしはじめたからよ。（憎々しさうに）衣食足つて贅澤を知るンだ、さすがの地方人めらも、何か飾りが欲しくなりやがつたんだ。

幹事　（反身になつて右手で後腦を抱へながら）あなたの口にかゝつちや叶はない。アハヽヽヽ。（急に眞面目な顏になつて）一件は、とう〳〵三萬圓で、西の宮が持つて行きましたよ。

顧問　（冷然として）例の歌麿はどうしたね？

幹事　あの肉筆の藤娘でげすか？（一寸心配さうに）ありや値が割に張つてますからね、まだ嫁入り先きが定りませんよ。（そろ〳〵笑ひ顏になりかけて）併し肉筆であんなのは絕品ですよ。彩色が少しも褪色しませんで、まるできのふ畫いたやうでさァ。全くの萬年孃でげす。アハヽヽハヽ。

顧問　北齋の鐘馗は？

幹事　（又眞面目になつて）あれもまだ賣れませんや。いゝ出來ですがねえ。（心配さうに）つまり大き過ぎて用ひ處に困るんでげせう。

顧問　とにかく今度の會は大成功だねえ。

幹事　（笑ひ顏になつて）何事も招牌と廣告ですよ。アハ、、、、。柳下伯の名前が利いたんでげす、柳下伯主催といふのが。

顧問　フ、、、（と鼻で笑つて）いゝ氣なもんだ。（憎々しさうに）柳下の會と來りや何時でも旨い物が攫まると思ひ込んでゐやがるところが、狡猾なやうでも流石に明治ッぺいどもの與みし易いところだね。へ、。

幹事　鼻の先で笑つて、懷手のまゝ、上手へ歩き出す。幹事も續いて歩きながら

幹事　與みしがたいのは天保度の古狸ですかな。アハ、、、、。

顧問　フ、。

佛頂面をして上手へ入る。幹事も入る。

引違へて上手から人の善さゝうな五十五六の紳士、商人かとも見える

が、言葉づかひは學者かとも思はれる。禿げかゝつた胡麻鹽頭、八字髭は比較的立派なはう。流行後れの外套を着流しの上に着てゐる。少し先に立つて二十三四の青年、學生風、呑廣、學生としては帽子でもステッキでも生粹のハイカラ好み。元氣な口吻、胡麻鹽を「叔父さん」と呼ぶ。ステッキを揮つて下手へずん〳〵と行つてしまふ。叔父は如何したか停立して上手を詠めてゐる。行き過ぎた甥は戻つて來た。

甥　（じれつたさうに）叔父さん！……叔父さん！（傍まで來て）何をさう珍らしさうに見てるんです、叔父さん？

叔父　（猶ほ上手を見たまゝて）感心してるんだよ。（頰を撫でながら）此體ぢやア、もう三年と經たんうちに、予や明治の浦島になッちまひさうだ。

甥　（無頓着に）なぜです？

叔父　（向き直つて）どうも人間の顏がだね、見れば見るほど次第に日本人離れがして來るやうだからさ。予とは沒交渉のやうな人相が多くなつたよ。今逢つた若い男なんざ純然たる西洋人だね。其癖、雜種兒ぢやアない。

甥　（ステッキで砂利をつゝきながら）おや〳〵、叔父さんも大分老い込みましたね。批評の口吻がそろそろ悲觀的になりましたねえ。人相が變つたとおつしやるけれど、要するに古い日本人

が過ぎ去つて、新しい日本人が增加したに過ぎないぢやありませんか？

叔父　いかさま、それも一理だね。只いかにも喰べ附けないものが怖ろしく殖えたから驚くよ。引込んでゐたのは僅た四五年だのに、社會の様子は飜然と變つてしまつた。名も解らんやうなものが多くッて、方角が知れなくなつた。けふからちッとお前がたに教へて貰はんけりやならん。a b c から習ひなほしだ。ハヽヽヽヽ。

甥　菱沼の伯父さんのやうに「あヽ、厭だ〳〵！」てなことを連發して、逃げ足になつちゃいけませんよ。

叔父　さア、大分あぶなかしくなつて來たよ。ハヽヽヽヽ。……少し休まう。

叔父は奥の床几へ掛ける。甥も掛ける。女、茶と櫻餅とを持つて出る。

叔父は紙卷を吸ひながら、頻りに珍らしさうに方々を詠めてゐる。

甥　何だい今日は？　頻りに骨董らしいものを持つて往來するぢやアないか？

（櫻餅を摘みながら）そら、今通りましたらう、新古美術品卽賣會といふ會の前を、あの歸りでさア。新聞で評判の歌麿と北齋の鐘馗は彼處にあるんですよ。あれだけでも御覽になりませんか？

叔父　いや、わたしゃ骨董にゃ趣味が無いよ、あんまり。

此時上手から青年三人、A、B、C、其中Aは文學書生らしく、某大學の徽章の附いた帽子をかぶり、木綿飛白に小倉の袴、兩手で大事さうに奇妙な體裁の女の石膏像めいたものを捧げて先に立つ。他の二人B、Cは、若手の文學者らしく、二人とも洋服、Bは大分氣取つた裝、相應に大きな額面を二枚――夢二式現代美人の半身を畫いたのと一種不思議な渦卷き盡しの手法でエタイの分らぬ人形を畫いたのと二枚――まで小脇に抱へてゐる。最後のCは新刊小說らしいのを指に挾んで、二三間後れて歩いてゐたが、急におッついて極めて頓狂に

C　ちよつと〳〵。もう一度見せたまへ。

夢二式の額に手をかける。Bはあわてゝ顏をしかめて

B　あゝ〳〵、あぶない〳〵！（情けない低い聲で）君、破けるよ！

Bは徐かに夢二式の額をCに渡す。三人とも停立する。

C　（詠歎的に額に見入つて）えいなア、何度見ても、理想的だねえ目が。（嬉しさうに）ねえ、君、同じく憧憬の目でもねえ、こりや、君、純日本式だからなア！　ヒヽヽヽヽ。

如何にも嬉しさうに畫から目を離さずに笑ふ。

（如何にも柔和に、ゆるやかに、女性的な調子で）さうさ。（つく〴〵畫を詠めて）それから此肩ンとこの感

じがいゝと思ふね。（間を置いて）所謂有るか無きかの肩だよ。（又間）單に是れだけで以て、東洋、殊に日本の女性（フェミニン）が象徴し得られてると思ふねえ。

C　（突然Aに對って）君々、君の其像もえいなア、殆どロダン其者だねえ。ヒヽヽヽ。ロダン以上だよ實際。かうなると、實際ソノ何だなア、模造と實物との間隔が審美學上の疑問になるねえ、曾て樗牛が論じたことがあつたがねえ、君。……

喋舌りながら三人とも行過ぎてしまふ。叔父は不審さうに見送って

叔父　何だか珍らしさうな畫だなア今のは？

朔　（無頓着に）なアに、ありや平凡です。

叔父　ありや日本の女の顔かい？

朔　（不平さうに）えゝ／／。幾らもありますよ實際、あゝいふ女が。現代式といふんです。

叔父　あゝ！　成る程。お前なんぞが好くんだね、あゝいふのを？

朔　（横をむいて）さういふ譯でもないんです。

叔父　とろける樣（やう）なといふんだね。……（適當な評語を思ひ出さうとするかの如く）でれりとした……*Appetizing*……（急須を取りあげて）どうだ櫻餅は？　もつと食はんかい？

叔父は茶を注いでゐる。朔は必要もなささうだのに、顏に靴を穿きな

ほしてゐる。

叔父　（茶を飲みながら）あの眞黑に、ぐる／／とぬたくつたやうな畫は何だい、先刻（さつき）の？

朔　あれが最新の佛蘭西畫家の一派です。立方派（キユービスト）の向うを張つて起つた渦卷派（うづまきは）といふんです。曲線で以て終始するんです。英ぢやヴオルテキシストと譯します。

叔父　（感心して）はてね。おつなものが流行るねえ。

此途端全くだしぬけに、下手奥の往來から一個のハイカラ美人が早足に出て來た。思ひ切つて現代的の覲粧。夢二式そつくりといふ顏立、年は二十以上に相違ないといふ證據があれども、一寸見たところは十七八、日本服、羽織、襟卷、何れも最新の三越、マーガレットも念入の和製ハイカラ、舶來別仕立の濃厚（こつてり）づくり、日傘にオペラ嚢（バツグ）。どうしたか上氣して裾前が亂れてゐる。直後（すぐ）につゞいて同年輩、同扮裝といつたものゝずツと割引、二等券どこの娘。前のがW、後のがX。Wは驅けて來て最（いつ）ち端の床几へ掛けるや否「おゝ、あつい！」と言つて酒落れた絹ハンケチで顏の汗を拭く。Xも同じ床几へ掛ける。

W　（心配さうに）え、三村さん、どうしたのさ？

X　どうしたつて（と大きな聲をしかけたが、叔父と朔に目を附けて、少し聲を低くし）あたしほんとに困つち

やつたわ！……

女が茶と櫻餅とを持つて來た。Wは話を中止した。女は店へ戻つた。

Wは少し落着いた調子で、併し大げさに眉を顰めて

W　彼人はあんな見ッともない裝をしてるでせう？　迚も〳〵一緒に歩かれやしないから、先へ歸してしまはうと思つて（次第に調子高になる）大急ぎで上野行きに乘つたのよ、あれから。

X　すると（演劇的に落膽の表情をして）運わるく滿員なの！（歎息して）どうしようかと思つてると、前にゐた男の人が三人まで一緒に起つて、わたしを優待してくれたのはよかつたけれどね、女の人までが一緒になつて私の顔ばかし見てるんでせう。（同情を求めつゝ）あたし困つたわ！　彼人を掛けさせる譯にはいかないし、さうかつて、すぐまへにぶらさがつてゐるんですから、話でもしかけられて御覽なさい、すぐ母子といふことに勘づかれるでせう。

（X顏に點頭いて同感の意を表する）　あたしそれが辛くてたまらないから、わざと横のはうを向いてゐたけど、（眉を顰めて）あの通りの無神經ですから、つい何か言ひ出しさうにするのよ、どうしようかと思つたわ私。

（心から同感したやうに）　絶體絶命ねえ！　わたしお察し爲てよ。それからどうしたの？

（歎息して）目で知らせやうかと思つても、みんなが穴のあくほど私の顏を見てるでせう、あ

たし困つちやつたの！　爲方が無いからエヘン〳〵と言つて知らせたんですけれど、「え、なにょを、なにょを？」と尙ほと頓狂な聲して、摺り寄つて來て、（眉を顰めて）とうど喋舌り出してしまつたのよ！　お國言葉もお國言葉、正眞正銘掘立村の方言そつくらなんでせう！

（落膽の表情をして）しやうがないわねえ、まア！

W　だから、（歎息して）みんなが私の顏を見てはあたしの顏、阿母の裝を見てはあたしの裝、あたしの顏を見ては阿母の裝、阿母の顏を見てはあたしの……まるで、あのほら、玩具屋の店先きにある首振り人形……どうでせう！……（泣聲になつて）一度に三十幾つといふ首振り人形が出來たらうぢやありませんか、あたしの顏を的に！　たまらないわ！　あたしくわつとして、腦貧血が起りさうになつたから、夢中で電車から降りてしまつたの。

X　まア！（と言つたが偶とWの顏を詠めて）あら眉墨が流れてるわ！

W　さう？（と急いて懷へ手を入れながら）びッしより汗かいたもんだから……

函迫を出して顏面修復をはじめる。

X　さうして阿母さんはどうして？

（顏をなほしながら）どうしたか？……そこどころぢゃなかつたわ……ほんとに私、どうしよう

かと思つたのよ。（懐中鏡と睨めくらをしながら）あんなのを母だと思はれて御覽なさい、折角の綺麗な、ロマンチックな空想がすつかり採み苦茶になッちまつて、生の歎びが三割がたも引き去られてしまふぢやありませんか？　あなたさう思はなくつて？

X　だつて阿母さんは、地理が分らないから、困るでせう。見て來なくつてもいゝこと？

W　（冷然と）かまはないわ。脊に腹は易へられないといふぢやなくつて？

これよりずつと前、朔の青年は、Wの顏を一目見るより狼狽へ出し、俄かに叔父を促して出掛けようとする。で、叔父は、最初は何氣なく茶菓の代を拂はうとしたが、娘らの話が耳に入ると、段々インテレストを覺えたらしく、二人の女の顏を見比べて、容易に立上りさうにもしない。朔は氣を採んで床几を離れ、「叔父さん、もう往きませう。」と度々棄ぜりふで催促するが、出掛けない。で、如何にも困つたといふ顏をしてあちこち歩いてゐる。

娘二人は、話が途切れたと思ふと、どうした機會にかWがふつと青年と顏を合せた。

W　あら、御機嫌よう！

敏捷に床几を離れて、新しい女らしく活潑にやつて來て握手を求める。

かうなると男性のはうは威嚴を失つて大まごつき、何だか口の中でムグムグとつぶやいてペコ〳〵とお辭儀ばかりしてゐる。

此途端、Xは下手奥の方を見て

X　あら、三村さん！　阿母さんがいらしつてよ！

頓狂な聲をする。

（怖い目――夢二式には見たことのない――怖い目をして）叱！……

W　青年は驚いて二足ほど退つた。Wは茶店に向つて

幾ら？

機敏なものである。咄嗟に代を拂ふ、オペラ嚢を攫む、Xへ目まぜをする。忽ち上手へ消えてしまつた、但し青年へ挨拶もしないで。

叔父は呆氣に取られた顏。朔は衣嚢からハンケチを取出して頬に襟元を拭いてゐる。同時に下手奥の方で、中國もよつぽどの山國らしい訛りの老婆聲で

老婆　おうい！　おきくよう！　待つてくれ、待つてくれ……

隨分と穢な扮裝の田舍婆さん、裾を高く端折つて、いかがはしい腰卷を出し、汗を拭き〳〵、喘ぎ〳〵早足に出る。

（息をきらしながら）ほんにゃに親をほうつていく奴が何處にあるぞい？　おらは（苦しさうに立止って）もそつとで死んにょつたぞえ。（上手へ向って）此の不幸者が！　こりゃ待たんけえ！

（又追ひかける）待つてくれちふのに！（泣聲になりかけて喘ぎ〳〵）おらは、東京來て、こねえな酷い目に遇ふとは思はざつたぞよ。おゝい、お菊、待たんけえ、待てちふのに〳〵！

喘ぎ〳〵上手へ追つて入る。叔父は脇目もふらず感じいつて見送つてゐたが、思はず太い息をついて

叔父　現代的だなア！（一寸甥を見返り）成る程、先刻の畫は全く寫實だ！……

手を組んで感心してゐる。甥は横を向いて、手持無沙汰さうに、ステッキで小石を跳ね飛ばしてゐる。叔父は偶と上手を見て

おや〳〵、外國人がやつて來る。美術品卽賣會で何か大きな物を買ひ込んだと見えて、人力で運んで來るわい。

上手から獨逸人らしい脊の高い外國人、妻と見える肥つた婦人、つゞいて若い車夫が、人力車に、何か知らず角ばつた大きな物を白金巾で掩つて載せて、牽いて來る。通辯だか案内者だか、粗末な洋服を被た邦人が二人、敵手になつて何やら喋舌りながら來る。獨逸人は盛んに手眞似をして喋舌りながら下手奥へ斜に横切り、やがて一寸立止つて、

又何か演說式に喋舌つてゐる。

此以前、甥は此一群を一寸見やつて

甥　（無頓着に）ありや平凡ですよ。きのふなんざ大八車三臺で運んださうです。

叔父　何を買ふんだい？

甥　もう平々凡々な骨董品でもないといふんで、近頃は、樹木、庭石附き茶室そつくりだの、位牌、佛具、粧飾等一切附き持佛堂だのといふ注文が多いさうです。地方ぢやア本堂そつくりを賣つた寺が幾らもあると言ひます。

叔父　今のは何だらう？

甥　多分華族か何かの古い墓碑でせう。

叔父　（下手奥を見て）何か頻りに喋舌つてるね。洋服が如何にも嬉しさうに聽いてるが何だい？

甥　つまり、何ですねえ、例の通り日本の美術思想を激賞してるんですねえ。要するに日本國其者が、古色蒼然たる一の神聖な、大きな古い美術品である、碎いていへば、無類な骨董品であり、巨大な玩具である、而してそれが、外國人一般が日本を世界のユーニークな帝國として推重する唯一若しくは第一の理由である、少くとも吾々は其意味に於て日本を尊重し愛好すると言つてゐるんです。

此うち西洋人の一群は行き過ぎてしまふ。忽ち上手で騒しい人聲が聞える。

叔父　何だあの騒ぎは！

叔父も床几を離れた。

中學の校長らしい一學者、四十年輩、羽織袴、つゞいて何宗大學の教師らしい同じく四十年輩の僧侶、頭髪は大分のばして制帽をかぶつてゐるが、殊勝らしい僧服、學者は風呂敷包みを、僧はポルトフォリオを携へて上手から出る。

校長　論語の正平版は欲しかつたですよ、複刻ですけれども。それからあの大石良雄の自筆！

僧侶　わたしはまたあの高麗燒きの觀音さんが欲しうごした。

校長　先刻の奈良佛は——あの塗金の——ありや怪しいですか？

僧侶　怪しいどころか、お話になりませんや。……

此時上手で、ウアー！　といふ聞の聲が聞える。僧は上手を見て

校長　やつて來た〳〵。まるで狂人だ。

（これも上手を眺めながら）併しあの孔夫子の像が吾々の手に入つたのは、獨り吾々の意を強うするに足るのみではないですよ、實に日本帝國の名譽でもあり、威力でもあるですよ。……

あ、御覽なさい、支那人が泣いてます。

上手から「わッしよい〳〵！」といふ掛け聲が段々近くなると、フロックコート、又は紋附の羽織、袴、或はモーニング、イブニング、春廣、着流し、いろ〳〵の扮裝をした大勢の紳士、多くは大きな公私の學校に緣故あるらしく、概して眞面目くさつた立派な顏附である、それがどうしたか、大きな青銅製かとも見える孔子の像を、子供がお神輿を擔ぐやうに大勢で擔ぎ上げて、わつしよい〳〵と押して來る。あとから男女の彌次馬がぞろ〳〵わや〳〵。其中に支那人が一人加はつて、人目も恥ぢず慟哭してゐる。

支那人　私國、中華、大變自慢してゐました。けれども今、とう〳〵、革命あります。國、瓦解します。（泣く）嗚兒々々！　私國、道德の太陽、大聖人文宣王の銅像まで、今日、日本に買ひ取られてしまひました。這不是國家要滅亡的兆頭麼、實在可悲之極。私、殘念で〳〵、しかたありません！（又泣く）嗚兒々々！　私國、物質的と精神的と、双つとも滅びてしまひます。（又泣く）嗚兒々々！

いつ誰れが持出したか茶店の床几が中央に出てゐる、とフロックコートの、大學の教授らしい一老博士、白い髪、白い髭、シルクハットを揮り

つゝ其上に突ッ立つて演説口調で

博士　空間（スペース）と時間（タイム）とは無限でありますけれども、最も古き併しながら最も長く且つ廣く中外に施して悖（もと）らざる、最も健全な、最も現實的な道德の大本尊を專有してをりまするは、獨り大日本帝國のみでありまする。……

皆々　ヒヤ〳〵！

博士　吾々日本國民のみでありまする。……

皆々　ヒヤ〳〵！

博士　願はくは、日本帝國の爲に、此大道德の本尊を專有し得たことを祝して、萬歲を唱へませう。

皆々　ヒヤ〳〵！

博士　現實的大道德萬歲！……萬歲！……萬々歲！

皆々　現實的大道德萬歲!!……萬歲!!……萬々歲!!

唱へ終つたかと思ふと、誰れがインピータスを與へたか知らず「わッしよいわッしよい！」と一齊に叫び出して再び銅像を擔ぎ出す。途端に上手奥て、例の大佛樣が鼻かんでゐるのかと思ふやうなプーブー！

といふ殺風景な音がする、自動車の喇叭である。併しそれには一切かまはず、一同は狂氣（きちがひ）のやうに

皆々　わッしよい〳〵!!

叔父はふッと心附いて吃驚し

叔父　あ、あぶない！　自働車だ〳〵！

一同は委細かまはず

皆々　わッしよい〳〵!!

甥の青年、其他二三人自動車に氣が附いて

二三人　自働車だ〳〵!!

と叫ぶ。

皆々　わッしよい〳〵!!!

プーブーといふ殺風景な喇叭の聲。

舞臺がだん〳〵薄暗くなる。眞暗になる。幕が降りる。

皆々　わッしよい〳〵!!!

突然ウアー!!　といふ喧囂。騷がしい數百の足音。プーブーといふ殺

風景な餘韻を殘して軋り去る一種異樣の車輪の響き。

上演年表

牧の方

役＼時＼處	明治三十八年五月	明治三十八年七月	大正六年七月	大正十五年四月
牧の方	中村芝翫（後の歌右衛門）	中村芝翫（後の歌右衛門）	中村歌右衛門	中村歌右衛門
北條義時	市川高麗蔵（後の幸四郎）	中村鴈治郎	市川八百蔵（後の中車）	市川中車
畠山重保	故嵐徳三郎（後の璃寛）	故中村玉七	市村羽左衛門	市村羽左衛門
稲毛入道	故片岡市蔵	故中村傳五郎	故市川段四郎	市川箱登羅
北條時政	市川荒次郎	故中村福助（後の梅玉）	故中村芝鶴（後の傳九郎）	中村鶴蔵
穂積瀬平	關花助（後の三十郎）	中村駒助（後の友右衛門）	片岡市蔵	中村魁車
稲毛重政	市川新十郎	市川箱登羅	市川猿之助	市村龜蔵
深見三郎	尾上榮三郎（後の彦三郎）	故嵐璃珏	市村龜蔵	片岡市蔵
折枝	故市川女寅（後の門之助）	嵐吉三郎	吾妻市之丞	なし
醫師紀河宗近	中村翫助	中村傳蔵	中村歌十郎	なし

牧左源太	故中村勘五郎（後の仲蔵）	故中村翫太郎	阪東村右衛門
牧ノ臣藤太	中村駒助（後の友右衛門）	嵐岡之助	中村芝賞（勝吉トシテ）	なし
牧ノ臣藤内	中村助五郎	中村芝歌蔵（後の竹三郎）	阪東羽太蔵	なし
結城七郎	中村翫助	中村林若	なし	なし
伊豫の局	中村銀之助	中村成笑	なし	なし
笹尾の局	中村明石	中村扇成	なし	なし
力土軍平	なし	なし	市川左升	阪東羽太蔵
力士兵六	なし	なし	中村鶴蔵	中村翫右衛門
籠手田勘六	中村成三郎	中村成三郎	市川松尾（後の八百蔵）	中村大八
木匠四郎作	市川荒次郎	中村成三郎	市川左升	なし
將軍實朝	中村兒太郎（後の福助）	中村兒太郎（後の福助）	市村竹松	片岡十蔵
北條政範	市川ほたん（後の莚升）	林長三郎	中村福助	中村兒太郎
吳羽の前	阪東秀調	中村政治郎（後の福助）	澤村源之助	市川莚女
平賀朝雅	故市川猿之助（後の段四郎）	嵐吉三郎	市川左團次	市川左團次
照子の前	中村芝翫（後の歌右衛門）	中村政治郎（後の福助）	中村歌右衛門	中村福助

＊1　此演出は改訂稿本に據る。

＊2　腰越旅館中門内の場以下を三幕として上演。

名殘の星月夜

役	時	大正九年五月
	處	東京 歌舞伎座
將軍實朝		中村歌右衛門
深見三郎		市川中車
尼御臺		市川中車
結城朝光		市村羽左衛門
公曉禪師		市川左團次
備中の阿闍梨		故中村傳九郎
日の岡		故中村傳九郎
陳和郷		片岡市藏
狂女		市川猿之助
狂女の母		中村鶴藏

繪の浦	故中村歌女之丞
所化淨念	阪東村右衛門
所化惠念	中村翫右衛門
三浦駒若	市川八百藏
大場の權平太	市川七百藏
堀の彌源太	市川左升
實朝の御臺所	中村福助
實阿彌	松本幸四郎
大江入道	片岡仁左衛門

靈驗

役	時	處
盲乞食又さ	大正三年九月	東京 帝國劇場
同　お酒子	大正六年九月	同　新富座
鍛冶屋の忠さん		
桶屋の左古		
傘屋の彌太		
村の娘和栗		
同　松江		
小間物屋		
旅人		
村の娘		

故東儀鐵笛	故東儀鐵笛		
都鄉道子	河合武雄		
元安豐	水口薇陽		
大村敦	松本要次郎		
小笠原茂夫	東辰夫		
大浦雅子	村田式部		
澤村かほる	松葉文雄		
不明	岩田祐吉		
不明	久保田甲陽		
不明	池內淸峰		

野良歸りの嬶	不明	大島小太郎	
同　老婆	不明	小山口春雄	
廣沼の小鹽ッ子	秋元千代子	花柳章太郎	
飛雲上人	故土肥春曙	伊井蓉峰	

大正十年九月　大阪中央公會堂にて戲曲座の上演あれど、役割不明。

現代男

役	時	處
埴輪支郎	大正四年一月	東京有樂座
河田いよ子	大正九年十二月	同 椿山莊隣地
晉羽かね子	故東儀鐵笛	友田恭助
水谷八重子		

骨董熱

役	時	處
美術品卽賣會幹事	明治四十五年六月	東京文藝協會試演場
倉橋仙太郎		
某流行會顧問		
小串繁樹		
茶店の女		
宮部靜子		
叔父の紳士		
森英治郎		
甥の青年		
澤田正二郎		
文學書生A		
鎌野誠一		
若い文學者B		
故林長三		
同C		
横川唯治（後の山田隆彌）		
夢二式のハイカラ娘W		
林千歲		
其友達の娘X		
和泉房江		

ハイカラ娘の母山出しの老婆	都鄉道子
背の高い外國人	上田榮
其妻の肥つた婦人	淺井房次
人力車夫	沖田豐三郎
洋服被た男	金井謹之助
中學校長の學者	河野伸介
何宗大學の教師らしい僧	戸田震二
大學教授の博士	佐々木積
支那人	川井源藏
教授らしき紳士	武田正憲

第一卷脚本集所載上演年表中「桐一葉」は片岡仁左衛門を主座として中國、九州十ヶ所以上に亙る巡演、「香手鳥孤城落月」は中村歌右衛門を主座として東北地方同じく十ヶ所以上に亙る巡演、「法難」は東儀鐵笛を主座とせる新文藝協會の中國、九州の巡演十數ヶ所あれど、全て其記錄を省略せり。該年表に書き漏したればこゝに是れを補ふ。

大正十五年十二月十二日印刷
大正十五年十二月十五日發行

著作者檢印

逍遙選集第二卷
非賣品

著作者　坪內雄藏
東京市日本橋區通四丁目五番地

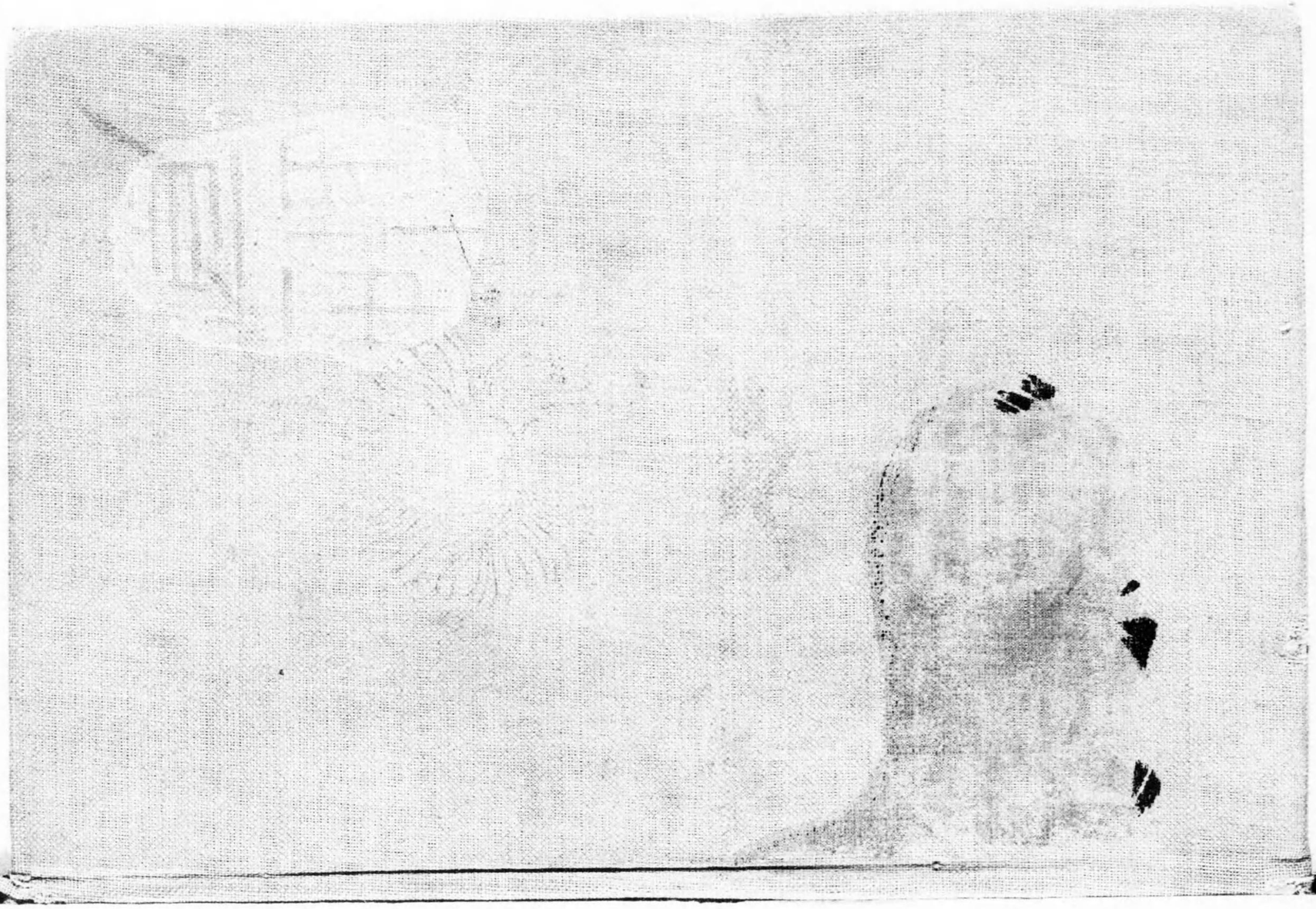
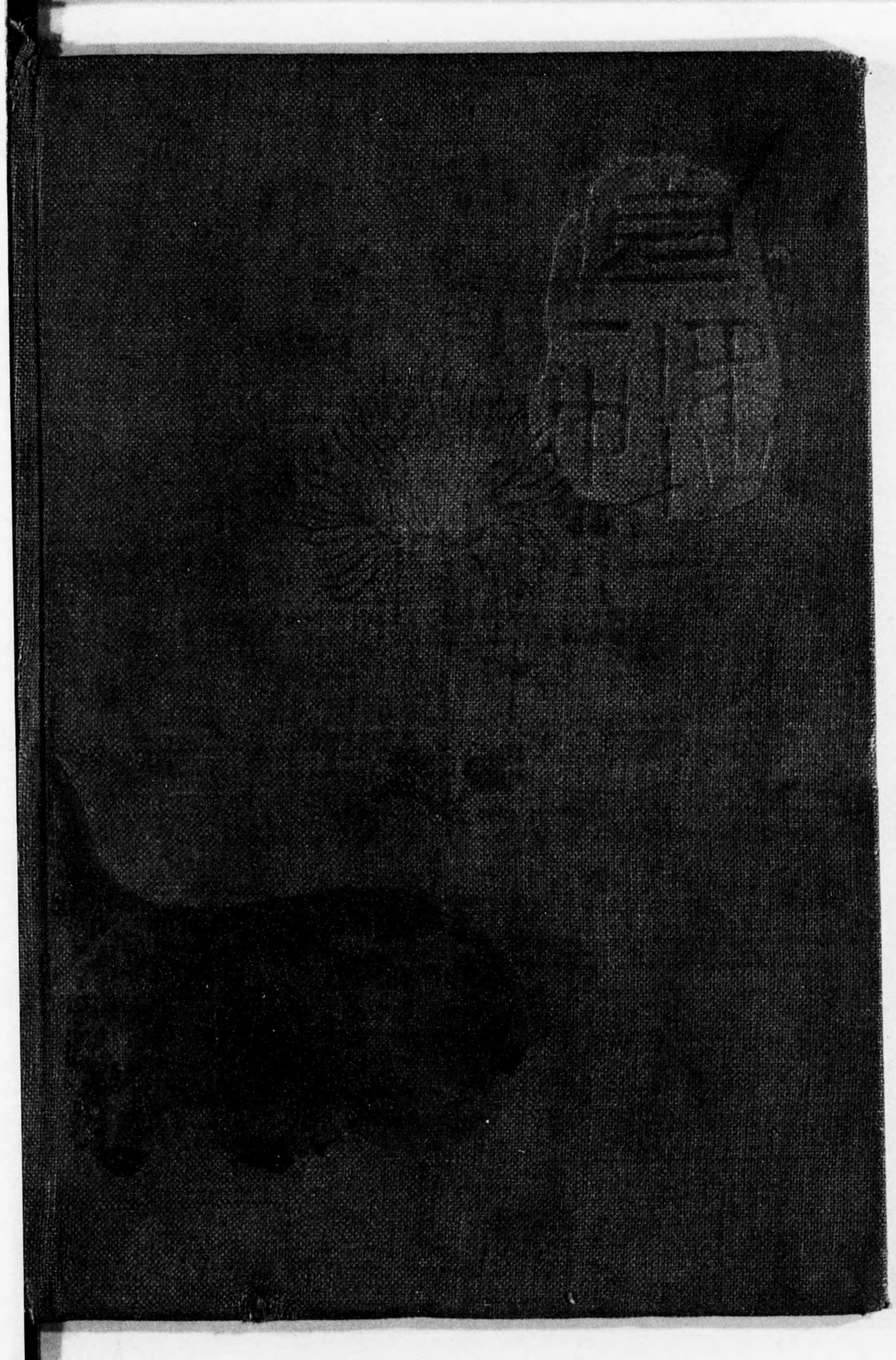
發行者　和田利彦
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者　木呂子斗鬼次
東京市日本橋區通四丁目五番地

刊行所　春陽堂
電話大手五一・四二一〇
振替口座東京一六一七〇

東京帝國大學圖書之印

555
14



終